



野菜・果樹・花きに発生するアザミウマ類の見分け方と被害の特徴

地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所

しば
柴

お
尾

まなぶ
学

はじめに

日本で農作物を加害するアザミウマ類は3科44種が知られている（日本応用動物昆虫学会, 2006）。これらのアザミウマ類は、体長が1~2 mmと微小で、新芽や花等の間隙を好むため、低密度のときには発見が困難である。また、広食性の種が多く、吸汁による直接的な被害に加えて、ウイルス病を媒介する。さらに、殺虫剤に対する抵抗性を高度に発達させている種もあるため、殺虫剤のみによる防除が困難である。

前述のように、アザミウマ類は非常に微小であるため、肉眼による種の同定は難しい。また、種によって有効薬剤が異なるため、農業現場ではできるだけ迅速な種の特定が求められる。そこで、本稿では、既報の「野菜で問題となるアザミウマの見分け方」（柴尾, 2011）と「野菜のアザミウマ類の発生生態と防除」（柴尾, 2019）を改訂するとともに、新たに果樹や花きも加え、これらの作物に発生する主要なアザミウマ類5種の見分け方と被害の特徴についてポイントを紹介する。

植物防疫

I アザミウマ類の主要5種

ミナミキイロアザミウマ *Thrips palmi* Karny

海外からの侵入種で、日本では1978年に宮崎県で初確認された。本州、四国、九州、沖縄に分布している。雌成虫（図-1）は体長1.2~1.4 mm、体色は黄色であり、雄成虫は体長0.9~1.0 mm、体色は淡黄色である。翅の毛が黒く、背中でたたむと真ん中に黒い筋があるよう見える。卵は新芽や新葉の組織内に1卵ずつ産卵する。成幼虫は葉、新芽、果実を吸汁する。休眠性はない。露地栽培では5~10月、特に7~8月の発生が多い。低温には弱く、寒地の野外では越冬できない。施設野菜では周年発生し、特に加温して栽培するナス科やウリ科の野菜で多発する。ただし、トマトではほとんど発生しない。メロン黄化えそウイルス（MYSV）やスイカ灰白色斑紋ウイルス（WSMoV）等を媒介する。多くの殺虫剤に対して抵抗性を発達させている。

ネギアザミウマ *Thrips tabaci* Lindeman

在来種で、日本全国に分布している。雌成虫（図-2右）は体長1.1~1.6 mm、体色は夏期高温時には黄色~黄褐色、



図-1 ミナミキイロアザミウマ雌成虫



図-2 ネギアザミウマ雌成虫（右）と
雄成虫（左）